

肥前國
雲仙嶽

丈トモ知レヌ谷アリ、所謂石窟石室ナド皆此中ニヤ、又山半ニ池アリ、池城ト名付ク、旱魃ニ雨ヲ乞ヘバ、必靈驗アリトゾ、此山遠望富士ニ似タリトテ、人皆是ヲ豊後富士ト稱ス、

〔遊囊賛記十二〕 豊國紀行、鶴見山ノ西ニ湯嶽アリ、是柚布山ナリ、又木綿山トモイフ、古歌アリ、名所ナリ、俗ニ筑紫ノ富士トイフ、極テ高山ナリ、鶴見嶽ヨリ猶高シ、此山ノ下ニ抽布院トイフ村アリ、所々温泉アリ、

〔西遊雜記七〕 雲仙ケ嶽俗に温泉には高山にして、昔八寺院三千坊ありて、今の高野山のごとく、食地も多、繁昌せし佛地也しに、元龜年中より、南蠻國より渡りし異僧此山に住して、彼のやうの法を延めて、一山ことぐくヤソの宗門に入て、大ひに信用し、當山より僧を九州にめぐらし、ヤソの法を弘む、肥前の國中過半、此法にかたむく、元和の頃公儀より嚴敷禁じ給ひて、寺院を焼亡し、此法を改め、さる僧徒數百人、血の池と稱せる、熱海の涌出る池へ沈めて、一寺は殘らず破却し給ふ、是より以來異法を禁じ給ふ事嚴重也といへども、今以九州の地は遺事残りて、他國と違ひ御吟味つよく、繪踏ゑりあわせといふ事ありて、異法の本尊を銅板に鑄付、夫を下民にふまする也、大勢の中には、踏事をいやがりて、彼本尊の上をふむまねをして、飛越るものありと風聞す、悪人を集め入には、色々怪異ある法といふ、扱此山におゆて、湯の涌出る所限りもなく、夫を地獄と稱して、さまざまの岩あり、一山硫黃の山にや、山に入ては硫黃の臭氣甚しく、今靈仙寺といふ小院一ヶ寺ありて、此寺に止宿もし、茶にてものむ事なるに、茶にても水にても、硫黃の臭氣ありて呑がたく、谷々の流にも湯氣立あがりて、いかにもあやしき山也、麓に温泉ありて湯本と云、功もありとて入湯の人もある所也、此温泉計にあらず、谷々に温泉ありと土人の物がたり也、當山などへは心ある人は登らぬ事也、毒石草もあらんやと思ふ程なる、あやしき山なりき、

〔笈埃隨筆四〕 地獄